聴覚障害教育における言語運用力育成（その３）

企画者　高井小織　（京都光華女子大学）
村松弘子　（愛知県立岡崎聾学校）
司会者　高井小織　（京都光華女子大学）
話題提供者　佐藤文昭　（筑波大学附属聴覚特別支援学校）
高野ちとせ（新潟市立鏡淵小学校難聴通級指導教室）
足立　貢　（大阪市立北中道小学校難聴学級）
指定討論者　藤本裕人　（帝京平成大学）

KEY WORDS: 聴覚障害　思春期　言語運用

【企画趣旨】

私達は，聴覚に障害のある児童生徒（以下，聴障児生）の思春期における言語課題に迫る Good Practice を，長期にわたって積み上げ，言語運用に影響する要素を考察したいと考えている。「９歳の峠」を理論上越えた彼らは，早期介入によって習得した言語を主体的に捉え直す段階を迎える。内省（自己）と対話（他者）を軸に，複層的な集団の中で言語運用力を高めようとする段階である。人工内耳の普及，補聴援助機器・技術の進歩や手話等，幅広い選択肢がある現在であるからこそ，実践者と研究者が互いのリアリズムをすりあわせながら連携し，実践知として確かなものとする必要を痛感している。

今年のシンポでは，小学６年生に焦点をあてる。新たなステージである中学校段階へ向かい，集団の質的変化を迎える力とは何か，学習言語の高次化を支える力とは何か，実践の場の相違と共通する支援の視点は何か，等について，活発な論議を期待している。

(1) 聾学校の児童同士のコミュニケーションの変容から言語運用を考える

聴覚障害教育において集団の確保は重要視されており，筑波大学附属聴覚特別支援学校（附属聾学校）小学部でも１学級６名前後の児童が在籍し，小集団ながらも活発な話し合い活動が行われている。

意欲的にやり取りしようとする反面，相互に十分伝わっていなかったり，話す・聞く態度が十分身に付いていなかったりして，トラブルになることも少なくない。ただ，そういったトラブルを糧にして，教師の支援や児童自身の意識の向上により，関わり方が改善されることも多い。

今回は，報告者が３年間持ち上がりで担当している児童たちについて，関わりの中でのトラブルや，それを踏まえての話し合いを繰り返してきた中で，どう関わり方が成長し，やり取りが向上したかについて報告する。（佐藤文昭）

(2) 通級児童の中学進学についての自己選択から言語運用を考える。

新潟市には，小学生の難聴通級指導教室が市内小学校に３教室設置されている。これら難聴通級指導教室に通う児童ほとんどが，学校あるいは学級の中できこえにくさがあるのは自分だけという環境の中で日々過ごしている。補聴器や人工内耳を装用していることで友達との違いを感じたり，コミュニケーションがうまくいかないことで孤立感を感じたりすることも少なくない。そのような葛藤を抱えながらも，小学６年になると，中学の進路選択という岐路に立つことになる。児童は，中学校見学会や中学生との交流等，新たな経験やかかわりを通して，内省と対話を繰り返しながら選択に至る。これら自己選択には，どのような経験やかかわりが作用し，どのように言語運用の高まりが見られたのかを検討し，報告する。（高野ちとせ）

(3) きこえにくい子どもたちの集団での活動を通して自己認識を深める

大阪市内には２校のセンター校としての難聴学級（居住区により，どちらの学校に通うことができるか決まっているが，校区外からも通学することが可能）があり，複数のきこえにくい子どもたちが在籍している。

校区内から少数のきこえにくい子どもたちが通う学校とは違い，きこえにくい子どもたちの集団が形成できることで，自分自身や他のきこえにくい子どもたちのきこえ方やきこえにくさ，不利になる状況や望ましい情報保障の方法など体験を元に知り認識を深めることができる。

きこえにくい子どもたちの自己認識を深めることを目的として取り組んだ活動（話し合い活動と，卒業するきこえにくい子どもたちが後輩の子どもたちへメッセージを伝える活動）を中心に報告する。（足立　貢）

【指定討論者の趣旨】

「言語力の育成」と「言語運用力の育成」について

本シンポジウムでは，「言語力」をベースとする「言語運用力」に焦点を当てて研究協議を重ねてきている。かなり以前は，「聾教育」というカテゴリーで実践研究がなされていたが，近年の難聴特別支援学級や通級指導という多様な教育の場の存在を踏まえつつ，「聴覚障害教育」という全体像を分母にして，「９歳の峠」を超えた後に，どのような教育実践が「言語運用力」の育成に効果があったのか，課題は何かについて，教育現場に指導方略を還元する視点を堅持しつつ考えていきたい。

これまでに，本シンポジウムでは，思春期・学習経験則・学習集団・同世代の経験・世界言語・「あんこと皮」・内省と対話など，複数の教育実践者が納得する実践知の共有が図られつつある。用語の使用としては概念定義の検討が必要であるが，「質と適時性がからみあった言語曝露量 exposure（検討中）」のような概念が存在すると感ずる。将来，大人社会で通用する言語運用力に導く手立てについて，教師の介入面についても加味しながら検討を行いたい。（藤本裕人）

【文献】高井小織「聴覚障がい児者の自己開示・自己権利擁護意識の発達についての一考察―どのように『トリセツ』をつくろうとするに至るか―」2017，（立命館大学院応用人間科学科修士論文）

（TAKAI Saori, MURAMTSU Hiroko, SATOU Fumiaki,TAKANO Chitose,ADACHI Mitugu, FUJIMOTO Hiroto）